「教育実習体験レポート」

［公立高等学校　情報］

今回の教育実習は 2 週間という期間しかなく、前半の 1 週間は担当の先生の授業見学や各クラスの様子を観察する日々であった。担当の先生は私たちが受けていた情報の担当の先生の次の先生であったが、当時私たちが受けていた授業とは全く違う授業を行っていた。母校の情報の授業と言えば、かつては個人個人でパソコンを見ながら実習をするか、教科書を眺めながら先生のプリントの語句埋めをするような座学であったが、今は主体的・対話的な授業を心がけているらしく、グループでテーマに沿った発表資料を作成して発表を行うなどアクティブラーニングをメインに授業を行っていた。教育実習初日、早速先生の授業があったが、とにかく忙しい授業だと感じた。どのグループにも発表スライド作成係、班長、発表原稿作成係などがあり、どの生徒も休む暇どころか授業開始までの休み時間を返上する勢いで課題に取り組んでいた。どうしてこんな忙しい授業が行われているのに授業が円滑に進んでいるのかという疑問を抱えながら初日は終わった。

前半一週間は担当クラスの授業も見学した。時間の都合上英語と古典だけだったが、それでもクラスの雰囲気や授業の進め方など、教科が違えど学べることが多く参考になった。他教科の授業見学をした際、どの教科でも寝ている生徒が唯一情報の授業を受けているときは一睡もしていないことに気づいた。また、他校の国語科の実習生が情報の授業を見に来た際、古典や現代文などの授業は寝ている生徒が多く困っているが、情報では寝ている生徒が一人もおらず羨ましいとこぼしていた時、はじめて情報の授業で誰も寝ていないことに気づいた。生徒にとって「授業で寝ない」ことほど当たり前で難しいことはないし、教員にとって「授業で寝させない」ことほど当たり前で難しいことはない。情報の授業で「寝ない」ことが当たり前になっているのは、この忙しさが理由なのではないかと考えた。

もちろんただ忙しいだけでは生徒が付いてこず、結果的に授業に参加することを諦めて寝てしまう。それを防止するために最初に各グループの役割表を提出させて各々の仕事を明確にし、各授業時間内に終わるかギリギリの量の課題を出すことで内職や睡眠の防止、さらにはフリーライダーの出現も阻止しているのである。また授業内で生徒全体に指示を出すだけでなく、グループの役割ごとにも細かい指示を出して自分が今すべきことを明確にしていることも、どれだけ課題が多くとも生徒が諦めずに授業に参加している理由なのではないかと考えた。また、授業の課題が多いため生徒が「何をすべきかわからない」といった状態になると授業が進まなくなってしまうため、役割ごとに指示を出して課題を完成させる道筋を作っているのではないかとも考えた。

授業見学の終わり頃に先生に聞いてみたところ、やはり授業内の課題量が少なかったり簡単だったりすると私語が増えたり寝だす生徒がいるらしく、そのためグループワークで役割を作ることで生徒同士がお互いを見張り寝にくくなり、また私語をする暇を与えないようにしているという。

一見慌ただしく見える授業でも深く観察すると様々なところに工夫がされており、生徒の知らないうちに「わかりやすい授業」が出来上がっているといったところはまさに先生が持つ「生徒の観察力」、「授業構成力」からできる技であり、ぜひ自分の研究授業に取り入れようと思った。

後半 1 週間はほとんどの情報の授業が自分の授業になっていた。教育実習が始まる前に担当の先生に打ち合わせをしていただけたことで、指導案や板書となるスライド、教材はすべて教育実習前に出来上がっていたが、実際の LAN 教室のパソコンの使い方や授業支援ソフト、共有フォルダの使い方を覚えるだけでも苦労した。個人的に一番大変だったのは授業支援ソフトで生徒のログイン状況を確認して出欠簿を記入することだった。方法としては座席表とパソコンの画面を見比べながら欠席している生徒と遅刻した生徒を記入し、再確認するだけであったが、成績に深く関わる出欠を自分が取っているという緊張や慣れていないからこその見間違いの不安があり、出欠を取るだけでも数分かかってしまった。

授業は基本的に 1 クラス 2 回、最低でもどのクラスも 1 回は授業を受けることができるようにしてくださった。1 回目の授業の流れとしては伝言ゲームを行った後に Word の文書編集に関する基本操作を学び、「自分の学校のいいトコロ」をテーマにワークシートを埋めてもらう予定であった。前半 1 週間の空いている時間はすべて模擬授業に費やし、初めての授業に挑んだ。自己紹介から伝言ゲームまでの流れは順調でつかみもほぼ完ぺきに決まったが、Word を利用する前の教材配布でトラブルが起きた。学校の共有フォルダを一斉に開けたことでパソコンが固まったのである。そのトラブルの解決に 10 分を使ってしまい、結局その授業は Word の基礎知識を学ぶところまでで終わってしまった。

その後担当の先生と相談し、本来であれば 1 回分の授業の内容を 2 回に分けて余裕をもって授業を行うこととなった。また、機材トラブルを回避するために教材を共有フォルダから取るのではなく、教師機のパソコンから一斉に配布することになった。初めて授業を行った日の放課後は変更に伴う指導案の修正に追われたが、次の日には修正後の指導案を確認しつつ授業を行うことができた。教材を一斉配布に変更し授業内容を減らしたことで授業は円滑に進み授業内にちょうど終わるようになったため、数クラスで微調整をした後に研究授業を行った。あらかじめお世話になった先生方に指導案を渡していたため、最終的に担当の先生を含めて 9 人の先生に授業を見ていただくことができた。研究授業後に授業の感想を尋ねに行ったところ、生徒に発問した際に返答がなかった際の対処法など生徒の発問に関してのアドバイスをもらうことはあったが、どの先生にも「声が通っていて指示も的確だったのでわかりやすい授業だった」と褒めてもらうことができ達成感と嬉しさを感じた。

一部のクラスは授業を 2 回行うことができたため、「自分の学校のいいトコロ」についてのワークシートを回収することができた。ワークシートは学校のいいトコロ、その理由、いいトコロの説明(固有名詞などの説明)、理由にまつわるエピソード、まとめの 5 つについて

プチポスターの形式で書いてもらった。ワークシートを回収したその日の放課後からチェック作業に入ったが、一人一人の成果物に対して細かくコメントを書くほど時間が足りず、効率と採点の質のバランスをどうするべきかとても悩んだ。最終的にはチェック済のハンコを押し、目に付いた文章に簡単なコメントを書き、まとめの文章に対して自分が思った感想を２，３行書いて返却することにした。これだけでも結構な時間がかかったため 19 時近くまで学校に残ってチェックをする日が続いた。担当の先生から許可はもらえていたため後悔はしていないが、今後はできる限り残って作業せずにかつ個人個人に沿ったコメントが書けるように時間配分したいと思った。

時間の都合上、ワークシートを回収したクラスのみを対象に授業アンケートを取ることができた。教員からのコメントよりも生徒のコメントの方が辛辣であると先生から聞いていたため覚悟して結果を見たが、案の定「作業時間が足りない」といったコメントやつかみとして用意していた伝言ゲームを「面白くない」と回答していた生徒もおり心が痛んだ。しかし、過半数の生徒は授業を面白いと回答してくれていたため達成感を感じた。今回の授業ではせっかくなのでパソコンのショートカットキーを身に着けてもらおうと思い、あえてパソコンの操作はできる限りショートカットキーを用いていたのだが、アンケートの感想でたくさんの生徒が「ショートカットキーを知ることができて良かった」と回答していたのがとても嬉しく、また「ワークシートのコメントが細かく書かれており嬉しかったです」といったコメントを見たときは遅くまで残って頑張った甲斐があったと思い、とても嬉しく感じた。

すべての授業やアンケートを読み終えた実習最終日の放課後、ワークシートを仕上げるためにある生徒が黙々と LAN 教室で課題をこなしていた。私はワークシートのチェックをしながらそれを遠目に眺めていたが、生徒がワークシートを提出しに来た時に「先生がもし授業をしなかったら、私たちはこの授業内容を学べなかったんですか？」と聞かれた。打ち合わせの際に Word についてはとても簡単に授業で説明する予定ではあったがショートカットキーを教える予定はないと聞いていたため、「ショートカットキーや Word の詳しい使い方に関しては多分授業ではやらなかったと思うよ」と返すと、生徒は嬉しそうな顔をして「じゃあ先生が来て授業をしてくれたから、私たちはこんな便利な機能を知ることができたのですね！」と私に言った後、片づけを済ませて「部活に行ってきます、先生ありがとうございました」と去っていった。

教師が生徒に教えるのは仕事であり当たり前だと思っていたため、教える内容で感謝されるとは思ってもいなかった。生徒がこんな風に喜んでくれたことが一番嬉しく、教員としてのやりがいを感じた瞬間だった。

今回の教育実習は私にとって教員という職業について改めて考える貴重な機会となった。また、教員のやりがい、教えることの大切さと難しさを体験することができ、この 2 週間のために今まで努力してきて本当に良かったと思った。しかし、その一方で教員としての知識

の浅さや経験のなさ、そして生徒によりよい学びを与えるための手際のなさを再確認した。
　将来自分が教員になるかどうかまだ定かではないが、いつか教員採用試験を受け教員を志したいと思う。その時までに教える立場の経験を積んで効率よく物事を進める術を学び、教員になった際には教科書に載っていることに加え、生徒が将来きっと必要とする機会があるであろう様々な知識を教えることができ、限られた時間の中で効率よく物事を進めながらも成果物も含めて一人一人の生徒に向き合える時間を多く取れる教員になりたいと思う。